

さざなみ

# 国語教室

さざなみ国語教室  
 第496号 2023年7月25日  
 発行者代表 吉永幸司  
 連絡先 大津市柳川2-11-5  
 TEL 077-522-1008  
 発行所 滋賀児童文化協会  
 NPO 現代の教育問題研究所

## 軸となる「ことばの力」

大橋 優一郎

「初めに言（ことば）があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。」

新約聖書のヨハネによる福音書の1章1・2節です。これと私が出会ったのは、中学に入学してすぐの頃だったと思います。吉永先生が当時校長先生を務めておられた京都女子大学附属小学校を二〇一三年春に卒業し、カトリックの洛星中学・高等学校に進学したのですが、そこでの生活のなかでこの聖書の「ことば」を知ったとき、感動に近い感情を覚えました。

小学校にて「国語力は人間力」を合い言葉とする教育を受け、多

種多様な経験を通しことばの重要性を学びました。そんな私にとって、「ことば」をこれほど重んじる一節で福音書が始まるという事実は、小学校で学んだことを人生の軸とすると心に決めるには十分すぎるほどのものだったので。

数学や物理など理系の分野に興味を持ち、楽しく勉強しながら年を重ねこの春東京大学工学部機械工学科を卒業するに至りました。中高大と進むにつれて扱う内容は専門的になります。ただどれほど専門的な理系学問であっても、考えるときに軸となるのは「ことば」です。授業や文献はことばで構成されます。それを読解し、解釈し

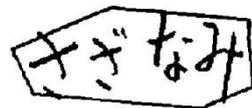
思索し、論文や発表などで人に伝える、これらの学問の行為すべてでことばが中心となります。

「国語力」の「国語」は世間では「文系」の範囲に分類されます。「理系の人間だからコミュニケーション能力が低くても仕方ない」などという言説も耳にします。しかしながら、この「国語力は人間力」という合い言葉にそのような「分類」があてはまると考えたことは一度もありません。文理など関係なく、もつと言えれば勉強に限らず、人生のあらゆる場面で不可欠な思考力・判断力・意思疎通能力などのすべてはことばを根本とするものです。

「すべてのものは、これによってできた。できたものうち、一つとしてこれによらないものはない。この命に命があった。光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった。」

冒頭で引用した聖書の部分の続きです。これからの長い人生、たとえ闇に包まれたような困難に遭っても、ことばの力を軸とする心の羅針盤の指す光を信じ、一歩ずつ歩んでいきたいと思えます。

（東京大学大学院 工学系研究科 機械工学専攻 修士1年）



▼数年前、「今の小学生の65%が、現在はまだ存在しない仕事に将来就くと予想される」ということが話題になりました。その後、外国語教育やプログラミング教育、SDGの教育などが充実が求められています。▼

世代を表現する用語に「Z世代とα世代」があるようです。Z世代は2000年代半ばから2010年までに生まれた世代、現在の中高生、20年代半ばの年齢であり、α世代は2020年以降に生まれた世代。現在は小学生以下の年齢。Z世代は幼少期からデジタルデバイスが身近にあったため、デジタルを活用した情報の収集が得意。α世代は生まれたときからスマートフォンやタブレットが身近にあることから、Z世代よりもさらに進んだデジタルネイティブにあたることと▼

▼教育としてのSDG。17の目標に関連した内容を学び、自分の問題として捉え、解決に向けて行動する力を身につけること等々刻々と変化する中で、環境への適応力や、新しいスキルを常に学び続ける力などが求められます▼学習指導要領においては「主体的・対話的で深い学び」の日常化をめざし言語力の一層の強化が求められます。Z世代が日々の話題になっている昨今です。人を育てる視点から「どうする？国語科」への問いは大きいと考えています。

（吉永幸司）

『いざ、実践！』  
井上 凜斗

この4月から、私はさざなみ国語教室に参加した。毎月の例会は、私にとっていつも実りのあるお話ばかりだ。正直、話についていくことで精一杯だが、自分が知らないこと、考えが及ばないことをたくさん教えてもらえることにワクワクしている。

しかし、学んだだけでは力にならない。学んだことはアウトプットしないと意味がない。

そこで、山田先生が実践しておられた『視写』を「一つの花」の学習で実践した。

学級の児童は長い文章の視写は初めてだ。そのため、学習用の視写プリントを作成した。プリントは視写がしやすいように一文ずつの文字数に合わせたマス目をつけた。また、文字抜けがないように、文の一番上の文字だけはわかるように工夫した。

準備は万端！いざ、実践！

子どもたちに全文視写について伝えると、不満の声も少しあった。しかし、視写を始めると、どの子も集中して取り組んだ。

利き手の小指球を黒くしている子や友だちと視写プリントを読み合う子、黙々と取り組む子など、

どの子も自分のペースでと取り組んだ。視写の速さに個人差はあったが、三日間続け、全員が書き終わった時はみんな喜んでた。

実践から、視写を取り組むことで、教材理解が深まっていることに気づいた。「一つの花」は、競争中の話であり、内容理解が難しい。

しかし、視写を取り組むことによつて、戦争時の情景や背景などを想像することができた。また、物語に繰り返し出てくる言葉、登場人物の行動や台詞など、だいたいの内容を理解していた。そのため、課題作りの時もたくさん疑問や課題を出し合うことができた。課題に対して、叙述をもとに自分の考えをもつこともでき、子ども同士で活発に意見交流もできた。

実践を終えて、『視写』の取り組みが、子どもたちの深い学びにつながられる効果的な手立てだと実感した。教材の内容理解が苦手な子も、この学習では意欲的に交流する様子が見られた。今後、教材に合わせながら、視写を繰り返し取り組ませていきたい。そして、これからもさざなみ国語教室で学んだことを積極的に実践し、自らの教師力を培っていきたい。子どもたちが深い学びを身につけられるように。

(豊郷町立日栄小学校)

1年生の絵日記に挑戦  
畑中 翔太

6月までに、ひらがなを一通り学習しました。繰り返しひらがなの練習をすることに加えて、絵日記の学習に取り組みははじめました。絵日記のテーマを「休みの日にあつたこと」にしていたので、基本的に月曜日に行いました。子どもの中には、休日に特に印象に残った出来事がない子もいることを予想して、「お家でしたことなどでもいいですよ。」と発問しました。

どんな休日をご過ごしていたのか聞いてみると、さすが1年生は元気に手を挙げて休日のことをたくさん教えてくれました。

「スーパーへお買い物に行つて、お菓子を買ってもらった」や「お父さんと川に遊びに行った」、「友だちと公園遊びに行きました」など、公園や川などの近所で過ごす子が多い印象でした。

絵日記の指導は、その時の思い出を絵に描くことと、その次に書きたい子は自分でどんなことをしたのか日記を書くように伝えました。まだ自分で書くことができない子は自分の絵を見て先生にその時のことをお話ししてもらいました。そこで聞き取ったことを私が

日記として書き留めました。一部紹介します。(AさんBさんは自筆。Cさんはお話してくれました。)

Aさん「おとうさんと いっしょにかわにいきました。だむをつくりました。たのしかったです。」

Bさん「おじいちゃんのおいで おじいちゃんのおたまを さわつたら つめたかった。」

Cさん「ぱぱと Cのともだちがきて、ごはんとか あいすとかくだものとか わたしが あるところに いきました。 たのしかったです。」

絵日記の回数を重ねるごとに、「今日は何を書こうかな」と自分で考える子がいたり、「自分で書いてみる」という子が増えたりしています。続けることの大切さを感じます。

ある子からお手紙をもらいました。そこには、「めんたいこパーク もじをかきます。ふくびきと ゆうほうきやちやを しました。」

もうすぐで たなばただね。もうすぐで ひつこすから てがみをあげる。」

と書かれていました。その子なりの気持ちのこもった文がとても嬉しかったです。自分のしたことが書かれていて、絵日記の経験が生かされているのかなと思えました。

(大津市立田上小学校)

レオレオ二さんの読書感想文  
川端 由起

スイミーの学習に寄せて、レオレオ二さんが書いた絵本を読み、感想を書くという学習を行いました。5月に昔話の読書感想文を見る姿があったので、今回は穴埋め作文にして書かせてみようと思いましたが、穴埋め作文に行くまでに、主に3ステップの書き出し作業を行いました。

初めは登場人物についてまとめさせました。主人公の名前、ほかの登場人物の名前、主人公と登場人物はどういう関係？家族？友達？敵？味方？の4つから選ばせました。登場人物の性格はどんな性格で、自分と似ているところはありますか。あなたが気に入った登場人物はいるか。いるならそれはどうしてか。また、あなたがきらいまたは苦手な登場人物はいるか。いるならそれはどうしてかをワークシートに書かせました。

次に、この本を読んでどんな場面でもどんな気持ちを感じたか。そして、自分も同じ経験をしたことがあるか、まったく同じではないけれども、似たような経験をしたことがあるか書かせました。最後に、自分がこの本を読んでわかったこと・気づいたこと、そしてこの本を読んでいない人にぜひ伝えたいことを書かせました。そして、いよいよ穴埋め作文で

す。はじめに本のタイトル、その本を選んだ理由、なか1で、本のあらすじ、なか2で本の心にのこったこと、まとめで、本を読んでこれからの自分に生かせようと思ったところを書かせました。国語や作文が好きな児童にはこの穴埋め作文はとても効果的で、「こういう風に書けばいいのよ」と書き方がとてもわかりやすい」と喜びの声を聞くことができました。

学年としては、スイミーの感想文を書き、家の人に紹介しよう！という学習がゴールでした。スイミーの感想文を書かせたところ、教科書の丸写しが多く、驚きでしたが、なので、時間はかかりますが、レオレオ二さんの他の作品で感想文の書き方を丁寧にやりました。レオレオ二さんの作品は、物語の表面だけ読んでいても、作者の伝えたいことは理解できません。2年生では理解できない作品もあり、4年生ぐらいでやっと理解できる絵本も幾つかあります。全く

感想文が書けない児童もいましたが、書き方を示すことにより、スイミーの感想文では、教科書を丸写ししていた何人か児童が自分の言葉で自分の気持ちを表現できました。丁寧に指導して良かったと思います。今回、物語の感想文を書くには様々な心情の表現を知って、理解していないと書けないことが改めてわかりました。モジュールタイムで様々なアプローチを用い、学習していきたいです。

(草津市立志津小学校)

低学年の国語科で  
大切にしたいこと  
川部 長人

①音読指導  
今年度の音読指導では「年間を通して、子どもたちに確かな音読の力を身に付けさせたい」という思いがある。今までの音読指導では年間を通して授業の初めに同じやり方で行ってきたが、今回は年間を通して子どもたちの音読する力を高めていきたいと思っ

小学校教員になって四年目。二回目の二年生を担任することとなった。日々の実践を行う中で、「自分の行っている指導で子どもたちに国語力が付いているのだろうか？」や「音読はなぜ行うのだろうか？」と悩む日が増えてきた。音読などの指導については、教師の当たり前になってしまっていて、何となく行っている場合が多くなってしまっていると感じる。今回の実践を通して、小学校低学年ではどのような指導を大切にしているのか子どもたちの姿をもとに考えていくようにしたい。単元は『名前を見てちょうだい』（東京書籍二年生）で行った。さざなみの例会などで、特に音読と視写の指導が大切だということを中心に述べ

音読できるように指導した。今回の『名前を見てちょうだい』の単元では、「場面の様子を声や動きで表そう」ということを中心に音読指導を行った。「あとずさり」や「したなめずり」などの難しい言葉も、動きで表すことにより内容理解が進んでいったように思う。また、「あたしのぼうしをかえしなさい」とえっちゃんという場面も、思いが伝わるように強い口調で読んだりするなど、工夫して読む子が増えていった。今回学んだ音読の工夫を次の単元でも生かしていきたい。

②視写による内容理解  
音読指導だけでなく、内容理解のために視写は効果的な指導の一つであると考え。特に低学年段階では、書いたことよって内容理解が進み、言葉にこだわって学習を進める子が増える。今回の単元でも場面ごとに視写の活動を入れ、どの子も確実に内容理解できるように指導していった。初めは

一時間の間に全て書ききることができない子もいたが、何回か行っていくと書くスピードが早くなり、最後の方には全員が書ききることができるようになった。また、子どもたちも自分の力の伸びを実感することができ、視写に対して前向きに取り組む子が多くなった。子どもたちのふりかえりを見ていても「視写をすることで内容が頭の中に入ってくる」と「視写をする」と言葉についてじっくり考えられる」など、視写の重要性を実感している子どもたちが多くなった。今後も継続して子どもたちの力を伸ばしていきたい。

(東近江市立能登川南小学校)

「わたしの国語通信」  
北川 雅士

9年間勤務した小学校を離れ、今年度から新たな小学校で勤務することとなった。児童の様子や地域の様子など新しい環境になると覚えることも多い。しかし、昨年度がそうであったように、今年度も国語科の実践を工夫しながら積み上げていきたいと感じている。教務という立場ではあるものの、国語の勉強、言葉の勉強をしていく機会はいろいろなところにあるのではないかと考え、機会をうまく活かして、校内の児童たちと学んだ事を周囲の先生方にも共有出来たらと考え、月に一枚程度の『国語通信』を発行する事を決め、毎月発行している。内容はその月の和風月名の紹介と、自習時間や、補充で入らせていただいた時間の国語の学びについて「こんな実践しましたよ」「こんな言葉の学びがありましたよ」と、紹介する内容にしている。

4月号は、職員のみなさんへのあいさつと、国語通信を書くことと考えるきっかけにもなった1年生の特別支援学級の児童2人と学習したひらがなの言葉集めについて紹介した。

与えられた課題に頑張つて取り組んでいました。この時間はひらがなの「り」の勉強だったので、書く練習をしたあと、言葉集めをしていくことになりました。  
T「りのつく動物はいますか」  
C「りす」 T「じゃありすのうたをつくってみましょう」という形で言葉集めの学習をしながら詩をつくることにしました。「り」の付く言葉を1年生の2人に交互に聞いて、それを「どうするか」を足していくという流れです。さいごの「〇がいっぱい 〇〇のうた」は固定です。結果下のような世界に一つの素敵な詩が完成しました。

りすのうた  
〇〇〇〇  
りんごをたべる。  
くりをひろう。  
はりねずみをみつける。  
つりにいく。  
りがいっぱい。  
りすのうた。

国語通信より

たったの1時間ではあったが、2人の1年生の児童と楽しく言葉を集めることができた。私自身、講師の経験も含めて1年生の担任

をしたことはない。そんな中でも、様々な学年の学習で授業づくりをイメージできるのは、様々な先生方から各学年の実践を学ぶことができたからだと思う。今回の言葉集めも「さざなみ国語教室」の例会の話題の中にあつた実践を思い出しながら「こういう言葉集めなら楽しそうだな。」と覚えていたことを実践してみた。さざなみ国語教室で学びはじめて10年以上が過ぎたが、担任という立場を離れて初めて、学ばせていただいたものへの感謝を感じている。様々な学年の学習に突然入ることになる際には、いつもさざなみ国語教室のホームページから記事を検索し、過去の実践を読みながら授業や指導の参考にしている。そして、自分がそうであったように、自身が児童とのやり取りを通して学んだ成果や反省点を校内の先生と共有していくことが、国語の学びを広げていくことに少しはつながるのではないかと考え、通信を書いていこうと考えている。

5月号は「五月雨とはどのような雨の様子なのか」という話題から、松尾芭蕉の俳句について紹介した。6月号は、4年生児童とのやりとりから「夏っていつからなん？」という質問に対するやり取りについて、7月号は3年生の物語教材「まいごのかぎ」の教材研究について筆者の寄稿文を紹介した。

まずは継続すること、そして少しでも先生方の学びになるようにこの通信を続けていきたいと思う。

(彦根市立河瀬小学校)

編集後記

▲六月例会(第四九五回)では、先ず、

今年度開催します国語教育実践を交流する研究会や「近江の子ども俳句教室」事業について、意義や開催時期等の確認をしました。県内外の実践者の交流の場を作り授業改善の実りを目差します。是非ご参加ください。▲続く提案は、井上滉斗さん(豊郷町立日栄小学校)から四年生の物語文を読むこととの指導(教材文「こんぎつね」)の授業構想でした。物語の「続きを子どもが書く活動」を計画したものでした。井上さんは本会での初提案です。▲同人自らの授業の実践を踏まえての意見など多様な交流で研究会は沸騰しました。▲本誌第三七五、六号に本会主宰の吉永幸司先生の「教材を読む」の連載があり、「こんぎつね」が取り上げられています。その冒頭文は「教材を読むのが楽しい。自問自答する。不思議と新しい事柄を発見する」です。読者・授業者として真摯に物語と対話をされておられ、自らもそうあるべきだと改めて教えられます。「さざなみ国語教室HP」より検索ください。多くの示唆に出会えます。▲授業は単元目標と言語活動と教材とが結びつくことが基本でしょう。そして、主体的な学びと対話的な学び合いのある展開を納得するよう学びの成果と課題を納得するような形成的な評価に工夫する。そんな授業作りの課題も浮かんできました。▲巻頭には、大橋優一郎様から玉稿をいただきました。深謝申し上げます。

(森 邦博)